P1-103

A大学における小児看護学オンライン実習での学生の学び

鬼頭 泰子[1]、長谷川 由香[1]、中谷 香[1]、黄波戸 航[2]
[1]佛教大学、
[2]姫路獨協大学

【目的】
2020年度、COVID-19の感染症流行によって、本学は臨地での実習が出来なくなり、オンラインによる模擬実習となった。本研究の目的は、オンラインによる小児看護学実習での学びを明らかにすることである。
【方法】
本学の小児看護学実習は、幼稚園実習、病院実習を各1週間行っている。この代替実習として、1週目の幼稚園代替実習では、保育園のDVDを視聴し、園児の行動を観察した。また、地域子育て支援事業の1項目を各学生で調べ、発表し共有した。2週目の病院代替実習は、DVD（気管支喘息の事例）での看護過程行い、看護実践としては、看護技術（吸入、清拭、VS等）を看護師役や子ども・母親役を考え作成し、ロールプレイで発表した。分析方法は、小児看護学実習の評価終了後、同意が得られた学生56名（91.8%）の学びから記述内容を抽出し、共同研究者間で類似した内容毎にまとめ整理した。
尚、調査は佛教大学「人を対象とする研究」倫理審査委員会にて承認（2020－30－B）を得て実施した。
【結果】
1週目の幼稚園オンライン実習の学びとして657（100%）の記述内容が抽出され、①子育て支援（地域・社会）31.8%②成長・発達過程における子どもへの支援方法27.4%③子どもの成長・発達過程21.3%④子どもの成長・発達過程における人的・物的環境15.7%⑤その他3.8%の5項目に分類された。2週目の病院オンライン実習の学びとしては、901（100%）の記述内容が抽出され、①健康問題をもつ子どもへの看護の実際（疾患や治療、検査、看護）30.7%②小児看護に必要な知識・技術・態度について既習内容を活用し実践する（看護過程：情報収集・関連図・看護問題・看護計画）13.9%③子どもの成長・発達過程における子ども・家族への支援13.8%④小児看護の役割について12%⑤健康問題の子どもをもつ家族への看護の実際（疾患や治療、検査、看護）10%⑥子どもの成長・発達過程9.6%⑦その他7%⑧子育て支援2.8%の8項目に分類された。
【考察】
1週目はDVD視聴より自分たちが調べた学習形態からの学びの記述が多く、2週目はロールプレイで看護師や子ども役など様々な視点から考え、工夫した実践から得た学びの記述が多くみられた。オンライン実習となった場合でもできるだけ学生が主体的に体験できる実習形態を取り入れていく必要がある。

P1-104

子どもの発熱に対する保護者の不安の実態調査

佐藤 由紀子[1]、住吉 智子[2]、田中 美央[2]
[1]新潟大学医学部保健学科、
[2]新潟大学 大学院 保健学研究科

【目的】
子どもの発熱に対する保護者の不安と認識に関しては、多くの報告がある。しかし、新型コロナウイルスのパンデミックによる社会情勢下で、不安や対処行動の変化については明らかになっていない。現在、感染リスク低減のためにホームケアの重要性が高まっている。そのため、乳幼児がいる保護者の、発熱に関する知識及び対処行動の実態と既存の研究の相違点を明らかにすることを本研究の目的とした。
【方法】
2021年8月－9月に、新潟市の子育て支援センター7か所の利用者にアンケートによる横断的調査を実施した。アンケートは、URLおよびQRコードから、Web上への回答も可能とした。調査内容は、基本属性および発熱に対する認識、発熱時のホームケアとした。分析は、基本属性および発熱に関連する認識に関しては単純集計を行い、調査年代ごとの先行研究の結果と比較し検討した。倫理的配慮として、新潟大学における人を対象とする研究等倫理審査委員会の承認を得て実施した。
【結果】
アンケートは273部配布、回収数は118部（43.2%）、有効回答数は98部（83.0%）であった。続柄は、母親が98.0%で、年齢は30歳代が71.5%と最も多かった。発熱の不安の程度について、「非常に不安を感じる」は33.3%、「やや不安を感じる」は50.0%であった。発熱時の対処方法は、「水分を取らせる」が94.9%で最も多く、次に「病院に連れて行く」が70名（71.4%）であった。「発熱による有害事象とは」の問いについては、1980年では「脳障害」の回答が46.0%で最も多いが、2000年以降は「けいれん」の回答が多く、今回の対象者では「けいれん」23.0%、「脱水」22.0%であった。さらに、2007年の日本の研究では「死」の回答はなかったが、今回は10%の回答があった。
【考察】
本研究では、8割以上の保護者が発熱に不安を感じていた。また、受診前に、保護者なりのホームケアを実施している様子が伺えた。先行研究との比較において、近年の気象変動による熱中症等の情報から、高体温は「脱水」や「死」を引き起こすという認識に繋がった可能性がある。保護者の発熱への認識や対処行動は、環境や社会情勢に影響を受けることが考えられ、継続した調査とその時代に即した保護者へのホームケア能力向上の支援が必要である。

Presented by Medical*Online